



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	川端康成文学における絵画〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	李, 雅旬
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13840号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/78695
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Li_Yaxun_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名： 李 雅 旬

主査 教 授 中 村 三 春
審査委員 副査 教 授 押 野 武 志
副査 教 授 谷 古 宇 尚

学位論文題名

川 端 康 成 文 学 に お け る 絵 画

・当該研究領域における本論文の研究成果

川端康成の作品には画家を主人公とするものや、絵画を基に書かれたもの、あるいは絵画が登場するものが数多くあり、川端には美術関係の評論も少なくない。また川端自身も少年時代に画家を志望し、長じてからも画家や美術関係者と交友関係があり、多くの美術品を蒐集していた。このように川端の文学はその生涯と総体に互って絵画との結びつきが深く、これまでも川端と絵画との関係については川端研究において論点とされてきたが、そのほとんどは実在の美術作品と川端との関わりを問題にする実証的な研究であり、文芸様式との繋がりや作風の変遷などの面にまで踏み込んだものは少なかった。その中で本論文は何よりも川端の文芸様式において言葉と絵とが交錯するあり方と、その変遷の実態をとらえることを主眼とし、川端の初期から晩年にかけて発表された作品のうち、とりわけ絵画との関わりが深い小説九編を取り上げて論じたものである。

本論文は特に小説テキストそのものの分析に重点を置き、従来の研究よりも芸術様式的な本質を掘り下げ、絵画との相互関係において形成された川端文学の実態を解明している。具体的には、

（一）川端文学と絵画との関わりを総体的に検証し、その結果として(1)戦前期、(2)昭和二〇年代、(3)昭和三〇年代以降の三つの時期区分を認め、(二)それぞれの時期における小説と絵画との関係の特徴を、(1)架空の絵画を中心に展開する小説、(2)実際に存在する絵画を言葉によって作中に取り込む小説、(3)挿絵や川端所蔵の絵画作品に描かれたイメージを巧みに生かした小説の三種類として規定し、(三)それら個々のテキストを、言語表現についてはナラトロジー（語り論）やレトリックの理論を、また絵画表現や絵画と言語表現との交差についてはイコノロジー（図像解釈学）研究や分析美学の理論などを援用して、具体的かつ理論的に究明している。その結果として、川端文学における絵画が、昭和初期から既に重要なモチーフとして登場し、次いで昭和二〇年代の小説においては、絵のイコノロジーが対義結合・象徴・省筆のレトリックなどを用いてより明確に現れ、さらに昭和三〇年代の円熟期に至っては、絵画を登場させず、あるいは実在の絵画から虚構の絵画を作り出すなど独自の方法で物語の展開に関与させたことを、創作史と様式論とを組み合わせた仕方により、極めて明快に示した。またその論証の過程において、未詳であった作中の新聞記事の出典を特定し、また作品と関連する絵画作品を新たに根拠を挙げて推定するなど、実証面においても進展を見せた。これらのことが相当の説得力を伴って詳細に追究されていることから、本論文は川端文学研究の領域において、高い研究成果を上げたものと認められる。

・学位授与に関する委員会の所見

本論文は川端の全小説を精査する中で、絵画との関わりの深い作品として「夫人の探偵」「春景色」「童謡」「夢」「花のいのち」「明月」「白雪』『美しさと哀しみと』『白馬』を取り上げて、小説研究と美術史の理論を駆使して精緻に論じ、また関連する絵画としても、岸田劉生・与謝蕪村・古賀春江・東山魁夷らの作品に触れている。その結果として本論文は、従来の川端研究では未解明であった川端の小説と絵画との関係について時期を追って精緻に論じており、その点において本審査委員会は本論文を高い水準にある研究として評価した。本論文は、世界的に著名なノーベル賞作家川端の作品について、新たな観点からいっそうの理解と評価を進めるための大きな貢献となろう。

ただし、文学研究と美術史の二つの領域にまたがる見地が求められる研究だけに、若干の問題点も審査において指摘された。すなわち、(1) 絵画と関係の深い作品を選んで集中的に論じているために、絵画との関わりの希薄な川端の作品について捨象せざるを得ず、川端文学の総体に迫るためには不満を残す結果となった点、(2) 作品分析に用いたレトリック論や分析美学の援用に関して、理論そのものの理解が不十分と思われる箇所が見られる点、(3) 特にイコノロジー研究に重点を置く一方で、それをを用いる必然性や、それ以外の美術史研究の理論的可能性について考慮が払われていない点などである。しかし、これらの諸点はいずれも本論文の意欲的な研究姿勢と表裏をなす問題であり、本論文全体の達成度を損なうものではない。それらは申請者が今後も引き続き川端文学に関する研究を持続し、また論述方法においてさらに習熟度を深めることにより、解決および発展の期待できる課題であると思われる。

本審査委員会は、以上のような審査結果に基づき、全員一致により、本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものと判断した。